第6章

アートクラブから二葉会へ
福島の写真団体形成と世代交代

堀　　宜雄
（福島県立美術館）

概要

この小稿では、福島県における近代写真表現の生成を中心に考察をする。明治期における福島県の写真といえば、一八八八（明治二一）年の磐梯山噴火を記録した災害写真が知られるが、本稿ではふれない[1]。

福島県では、一九〇八年の第6回奥羽六県連合共進会の開催を契機に、美術団体醸成の機運が高まり、一九一〇年、県内初の洋画と写真の団体、「アートクラブ」が福島市で産声を上げた。アートクラブは一九二二年に第10回展を開くと翌年には福島洋画会へと脱皮し、写真部はそれより早く、福島写真同好会（一九二〇年）、閑光会（一九二一年）と短期間に名称を変え、そして一九二二年には、新たな写真同好会・二葉会が結成されている。二葉会は、中央の大きな写真団体には属していないが、山本牧彦の日本光画協会の流れに位置し、アルス『カメラ』、『芸術写真研究』といった写真雑誌に、佐藤信、本田仙花、そして小関庄太郎が常連として入選を重ね、全国的にも注目された。

ここでは、明治末から昭和初期にいたる福島の写真団体の動きを概説する。典拠資料としては、アートクラブのアーカイバルな資料群である「富田不二夫資料」、そして九〇歳を過ぎてなお芸術写真家として活動した小関庄太郎（一九〇七―二〇〇三）の資料、二葉会主宰者だった佐藤信資料である。芸術写真の時代の活動事例として写真史のなかに位置づけてみたい[2]。

1．奥羽六県連合共進会とアートクラブ

奥羽六県連合（物産）共進会は、一八九四年に第1回（仙台市）、一八九七年に第2回（盛岡市）、一八九九年第3回（青森市）、一九〇一年第4回（山形市）、一九〇六年第5回（秋田市）で開かれ、一九〇八年、市制施行されたばかりの福島市で第6回が開かれている。東北各県の物産品評会であるこの博覧会は、福島県庁を第1号館としてその周辺に仮設の会場も建てられ、各県の出品物（蚕糸など）が展示された。文字通り官民あげての一大イベントであり、戊辰戦争で会津を中心に甚大な犠牲を強いられた福島県は、東北の共進会最後の開催地として、ようやく名実共に「県庁所在地福島市」の体裁を内外にアピールすることができた[3]。ときの県知事は平岡定太郎（三島由紀夫の祖父）で、最終的には三〇万人をこえる観客がこの共進会に来場したため、成功裏に終えることができて面目を保ったものと思われる[4]。

そしてこの共進会の関連行事で美術展覧会が開かれた。のちに福島競馬場を誘致建設した実業家・大島要三（一八五九―一九三二）が責任者となり、日本赤十字社福島支部看護婦寄宿舎を会場に、主に掛軸や洋画が展示された。出品総数、八〇〇余点、空前の展覧会であったという[5]。内容は、東京美術学校所蔵の雪舟、雪村といった古画をはじめ、橋本雅邦、菱田春草の新画、黒田清輝や石井柏亭らの洋画、そうして福島県出身の若手画家、勝田蕉琴、荻生天泉、坂内青嵐、太田秋民、土橋華城、油井夫山、紺野三郎の作品が展示された。このうち、東京美術学校の卒業生および在学生であった、蕉琴、天泉、青嵐、そして油井夫山の四名は展覧会幹事に指名され、展覧会の実現に奔走した。残念ながら、美術展覧会の写真はほとんどなく、実際どのような展示で、観客がどう反応したのかは不明だが、以後、福島市

で美術展が開かれる大きな契機となったことは疑いようがない。そして、その美術展覧会の実現に奔走した幹事、油井夫山が、アートクラブ結成の中心的な役割を果たしたのである。【図1】【図2】

2．アートクラブ

一九一〇（明治四三）年、共進会での美術展から二年後、県内初の美術団体が福島市で結成された。名称は「アートクラブ」である。福島市中町の商家出身である、油井夫山と富田不二夫（本名：藤五郎）が中心となり、紺野三郎、竹下明治郎、大石源太郎らが参加し、福島中学の美術教諭・堀江繁太郎、福島師範学校教諭服部保一も加わって、一二名の会員が美術を研究し、展覧会などの発表活動を展開した。

これは福島県内初の美術運動であり、一九一一（明治四四）年から、活動が終息する一九二二（大正一一）年まで、10回の展覧会を福島市で行い、県内各地にも刺激を与えていく。部門は、洋画部、水彩部、日本画部、写真部の四つであるが、水彩部は独立したものではなく、大きくは洋画、日本画、写真であった。のちには、女流画家の草分け・大内のぶ子（一八八九―一九八二）や木下春（一八九二―一九七三）など多数の出品者を数え、夫山と懇意だった石井柏亭にも賛助出品を仰いだり、古美術コレクターからも作品を借りて新古美術展とするなど、福島県内の美術愛好家を啓蒙開拓していった。

主なメンバー　（太字は写真部）

油井　夫山（一八八四―一九三四　本名：忠助。福島中学卒、東京美術学校で黒田清輝に師事）洋画

富田不二夫（一八八六―一九八二　別名：藤太郎、藤五郎、香雪。東京で長谷川写真館に学ぶ）
洋画／写真

紺野　三郎（一八八五―一九一八　別号：渙水。東京美術学校に学ぶ、大正七年病没 洋画

竹下明治郎（一八八四―一九四〇　別号：楓亭、漂葉。福島中学、早稲田大学に学ぶ、実業家となる）
洋画

大石源太郎（一八八九―一九七八　別号：苔寂、苔玄、山牧。堀江繁太郎に師事、大正八年より日本画へ）
洋画

堀江繁太郎（一八七三―一九四六　別号：霞泉。講習会で教諭資格取得。福島中学美術教諭）
洋画／日本画

服部　保一（一八七〇―一九四七　別号：無声。山形生、東京美術学校卒。福島師範学校美術教諭）
日本画

田村鐵三郎（一八八六―一九七四　別号：凹眼。田村写真館の女婿。福島県写真帖を撮影）
洋画／写真

荒井　幸之（生没年不詳　北会津出身。東京高等師範に学び、明治末まで福島師範で教鞭）洋画

佐藤彦太郎（生没年不詳　別号：紫雲。）洋画

江間　常吉（生没年不詳　別号：孤郎。）洋画

丹野　尚（生没年不詳）洋画

上記以外に後から参加したと考えられる写真部会員は下記のとおり。

鈴木　紅雨（生没年不詳　本名：金次郎・敏夫）　写真

金田　北勝（生没年不詳　本名：駒次）　写真

本間貞一郎（生没年不詳）　写真　写真材料店日野屋の本間第一郎と同一人物か。

渡辺　秀光（生没年不詳）　写真

菊田　蝶秋（本名長三郎か　？―一九三〇？）　写真

創立当初の写真家、富田藤五郎（不二夫）、田村鉄三郎（凹眼）、鈴木金次郎（紅雨）、金田駒次（北勝）はいずれも写真館主であり、富田も東京・長谷川写真館で修業したことが知られる。【図3】

3．　アートクラブの展覧会

アートクラブは、一九一一（明治四四）年から、活動が終息する一九二二（大正一一）年まで、10回の展覧会を福島市で開催したが、こうした活動がわかるのは、富田不二夫がほぼすべての展覧会について、丹精込めた記録アルバムを作っていたからである。会場は、福島市公会堂や県会議事堂、旧税務署跡など、洋風の建築を借りているが、その展示作業は会員が行ったので、最初のうちは慣れずに、徹夜で飾り付けを行っても開会時間に間に合わず、大勢おしかけた来場者からは「まだかまだか！」とせっつかれ、「いましばらく」というやりとりがあったことなども記されている。初々しい展覧会へのあこがれと、実際に開催した苦労などがなまなましく伝わってくる。

回　年月日　［会場］総展示数〈内訳〉

①　一九一一（明治四四）四月二三日―二四日　［福島市公会堂］
二六二新古美術展覧会〈古画八三・会員一七九〉【図4―5】

②　一九一二（明治四五）四月二三日―二四日　［県会議事堂］
四五五〈会員一八七・学校生徒一二二・古画一四六〉【図6―8、15―17】

③　一九一三（大正二）四月二三日―二四日　［県会議事堂］
二一四〈会員九〇・学校生徒三〇弱・古画九四〉【図18―28】

④　一九一三（大正二）一〇月三日―一〇日　［県会議事堂］二五〇〈会員九三・古画一五七〉

⑤　一九一五（大正四）四月二三日―二五日　［旧福島税務署］
一三六〈会員八八・有志一三・参考古画三五〉

⑥　一九一六（大正五）四月二三日―二四日　［旧福島税務署］
一一三〈会員七九・有志二五・参考古画九〉

⑦　一九一七（大正六）一〇月九日―一一日　［角長商店楼上］
二九〈会員二九（急遽開催／会員七名）〉

⑧　一九一八（大正七）九月二二日―二四日　［第二小学校］
七〇〈会員七〇　紺野三郎遺作も展示〉

⑨　一九一九（大正八）四月二六日―二八日　［県会議事堂］
二三七奥羽美術展覧会〈会員一四五・賛助四二・参考古画五〇〉

⑩　一九二二（大正一一）一一月一八日―一九日［福島市公会堂］

※不明〈絵画四四・写真五一点が目録断片で確認される。実際はもっと多かったと思われる〉

なお、これ以外の小規模な展覧会は下記の通り。

・一九一二（大正元）九月［福島市公会堂］「しのぶ野画会（半切画会）」

・一九一四（大正三）九月［福島ホテル］「石井柏亭来福に伴う小画会」

4．アートクラブの出版物

アートクラブは、展覧会だけでなく、研究会、野外写生会などの活動を行うとともに、会員向けの雑誌を発行している。これも白根屋紙店の富田不二夫を中心に製作されたものだが、その多くは謄写版（いわゆるガリ版）によるもので、木版などより手軽に製作できたのである。発行部数は数部―三〇部程度と考えられる。【図9―12】

A『アーテスト』　一九一一年二月―八月　23.5 × 17.5cm　発行部数不明、非売。

おそらくアートクラブ最初の雑誌。現在2、3、5、6、7、8、9号が確認される。5号は第1回展覧会号、9号は「夢の跡」として平泉への写生旅行が掲載される。印刷は謄写版、写真図版は青写真（サイアノタイプ）貼付。

B『展覧会記念写真帖』　一九一一―一九二〇年　18.5 × 26.5cm　展覧会記念アルバム。

10回展をのぞく9号が確認される。発行部数不明、非売。巻末に展覧会目録が貼付される。印刷

は謄写版、写真は青写真と印画紙貼付。6、7、8回展は手書き、肉筆漫画入り。10回展は閑光会アルバム7号に記録がある。

C『LIGHT AND SHADOW』一九一三―一九一四年　31.0×23.0cm アートクラブ写真部の雑誌。

一九一三年五月の1号から翌年四月の14号までが確認される。発行部数不明、非売。印刷は謄写版、写真は青写真と印画紙貼付。

D『TANPOPO』一九二〇年一〇月―一九二一年五月　21.2×16.2cm 発行部数不明、非売。福島写真同好会の雑誌。現在1～3号が確認される。写真アルバム的写真図版は印画紙貼付。印刷は活版。

E『(閑光会アルバム)』一九二一年夏―一九二三年春　24.8×29.0cm　発行部数不明、非売。閑光会の雑誌。現在1―8号が確認される。写真作品集的大判のもの。表紙は木版貼付、写真図版は印画紙貼付。キャプションは木版。黒ラシャ紙に台紙貼された印画紙が貼られる。奥付はなく、見返しに大正○年とのみ付票貼付記載。

アートクラブの写真は、富田不二夫資料により、展覧会出品の主要作品がかなり判明する。それらを一瞥すると、大判カメラによる絵画的写真という、初期の芸術写真にほぼ一致する作風といってよいだろう。また、展覧会目録によれば、鶏卵紙やゴム印画などのピグメント印画法にも通じていたことがわかる。

5．福島写真同好会、閑光会

富田不二夫資料の小冊子『TANPOPO』によれば、一九二〇（大正九）年秋、新たな同好会・福島写真同好会が誕生したようである。アートクラブ写真部が休止または解散したということは同誌に記載はないが、巻末後書きを富田不二夫がおこない、雑誌の体裁も富田のテイストによるものと考えられるため、福島写真同好会はアートクラブ写真部の発展的解消と考えてよいだろう。何より参加メンバーが、富田不二夫、写真館主鈴木紅雨、渡辺秀光などがアートクラブからの継続である（田村鐵三郎の名は見えない）。以下、写真掲載者の名前を列記する。本間第一郎、立花銀次郎、渡邊保友、佐藤信、本田仙花、橘芳雲、佐藤彦太郎、渡邊蹴月、佐藤嘉重、丹治三郎、管野政見、渡邊秀夫、蜂須賀賢次郎、後藤谷彌、佐藤治平など。会員を広く募った結果、初見の写真家も多いが、写真図版を見るかぎり、初心者も多く混じってきたような印象を受ける。

そしてさらに翌一九二一年五月には、「閑光会」という団体が存在したらしい。富田資料にある『閑光会アルバム』8冊により、その存在が確認できる。

①一九二一夏　②一九二一秋　③静物一九二一　④人物一九二一　⑤一九二二春　⑥一九二二夏
⑦一九二二展覧会号　⑧一九二三春

このうち、閑光会第一回展が、アートクラブ第10回展と合同で展覧会を開催している（一九二二年一一月一八日―一九日／福島市公会堂）。閑光会については、アルバムの封筒にローマ字表記で、以下のように記される。

「閑光会／趣味の写真／毎年四回発行／春―夏―秋―冬／毎号写真二〇枚／

通巻第1号／夏の巻／福島　中町　閑光会発行／創立一九二一―五月」

発行元に中町とある以上、富田がつくった会と考えるのが自然だ。富田不二夫が関わった最後の写真団体と推測される。

一九一〇年　アートクラブ⇩一九二〇年　福島写真同好会→一九二一年五月　閑光会…

└→一九二二年一月　二葉会―一九四三年頃？

閑光会と、次世代写真家・佐藤信と本田仙花を中心に二葉会が、一九二一年に結成されるが、後者に、アートクラブ写真部の実質的リーダーであった富田不二夫は参加していない。【図13―14、29-39】

6．一九二〇年代の写真と二葉会

二葉会は、写真材料を扱った日野屋（福島市置賜町一三、経営者は本間第一郎）の二階を拠点に、一九二二年一月に結成された写真愛好団体である。一八九七（明治三〇）年生まれ、日野屋の店長であった佐藤信、裕福な質屋の倅・本田仙花が中心となり、のち小関庄太郎（一九〇七―二〇〇三）が加わることにより、全国的にも大きく認知される団体となった。

一九二〇年代は、ちょうど明治末からはじまった日本の芸術写真が、大きな転換期にさしかかる時期である。大阪の浪華写真倶楽部（一九〇四・明治三七年創立）、東京写真研究会（略称：研展、一九〇七・明治四〇年結成）といった老舗の写真団体を中心とした作風が広まり、それが一種のアカデ

ミズムとなって君臨していた。そうしたいわゆる「研展」派的表現にあきたらなかった福原信三を中心とした写真芸術社の一派や、淵上白陽を中心とした「構成派」とよばれる前衛的な表現を試みるもの、そうして新興勢力ともいうべき、写真雑誌『カメラ』『芸術写真研究』（編集：中島謙吉）を舞台に活躍したいわゆる〝ベス単派〟とよばれる作家群がいる。ベス単派とは、大正中期以降普及したヴェスト・ポケット・コダック、いわゆる〝ベス単カメラ〟を用いて写真制作を行ったため、この名がある。とくに関東大震災（一九二三・大正一二年）以降の日本の芸術写真は、このベス単派の活動によって特筆すべき多様性と表現の深まりをもったことが、こんにちあらためて注目されている。

代表的な作家に、山本牧彦、高山正隆、渡辺淳、田村栄、塩谷定好らがおり、彼らは一九二八（昭和三）年、山本を中心に「日本光画協会」を結成し、約六年間にわたり展覧会活動と、例会開催、作品集（『画集』）発行などを行い、日本の芸術写真に実り多い成果をもたらした。その表現の特徴をあげると、以下の四点であろう。

1. ネガから印画紙に焼き付けるとき、意図的に印画紙を丸めたりゆがめたりすることでゆがんだ画像が得られるが、この「デフォルマシオン」とよばれる技法を積極的にとりいれて、そこに作者の心象やある感情をこめようとした。
2. 印画修整技法から出発して、印画紙そのものにさまざまな修整処理をすることで、たんなる写真以上の表現効果をねらった「雑巾がけ」とよばれる技法を駆使した。印画紙を針や小刀のようなもので削ってハイライト効果を得たり、油絵の溶き油を塗ったのち墨や鉛筆などで書き起こしを行うものなど、作家により修整方法は異なるが、意図した自由な表現獲得のために「修整」

というよりは表現効果を狙って行ったのが特徴である。これは世界的にみて類例はなく、まったく日本独自の技法と考えてよいものである。

3. ベス単カメラのフードをはずすことで、淡いぼけ味のあるソフトフォーカスの画像が得られる。ソフトフォーカスによる印画が、どこか〝夢見心地な〟画像として歓迎された。また、ネガから印画紙に焼き付けを行う際、わざとピントをぼかして同様の効果を得るものも広く行われた。

4. ネガの一部を極端に引き延ばすことで、粗い粒子による印画が得られる、「粒子画」を制作した。これは、デフォルマシオンとともに焼き付け技法中の特殊なものと考えられる。

7. 二葉会の会員とその特質

二葉会については、稿者がかつてまとめた解説を以下記す。

発足：一九二二（大正一一）年一月［一九二六年アルス写真年鑑の記載による］

終息：一九四三（昭和一八）年頃［明確な根拠はなく、佐藤信遺族ききとりに基づく］

代表者：佐藤信

事務所：福島市置賜町一三番地　日野屋内

主な会員：佐藤信、本田仙花、小関庄太郎、伊藤晨水、伊東松葉、菊田蝶秋、伊藤弥十郎、三瓶秀三、金澤治男、三浦通庸、吹澤龍一、和田義雄、長澤松太郎、山崎金三郎、島崎得之助、本間第一郎、岩崎登代美、氏家健吉、木村長雄、村山俊吾（小関アルバム等による）

『写真年鑑』による会員数は以下のとおり

不　明［一九二四―二五朝日］／三五名［一九二五―二六朝日］
三八名［一九二六アルス］　／三五名［一九二六―二七朝日］
一五名［一九二九―三〇朝日］／一五名［一九三〇―三一朝日］

主な活動：例会（月1回程度）／会報発行
（一九三一年頃小関編集によるパンフレットを発行したという）／展覧会
（一九三五年一一月二日―四日［郡山］他三団体との連合展／他未確認[6]）

二葉会は、明治末からはじまるアートクラブ写真部、具体的には富田不二夫、田村鐵三郎、鈴木紅雨、渡邊秀光ら第一世代から、袂を分かつ形で、佐藤信、本田仙花らいわば第二世代の写真家たちが立ち上げた同好会と考えられる。アートクラブと異なり、活動記録はかなり乏しいが、三羽ガラスといってよい、佐藤信、本田仙花、小関庄太郎の当時の写真作品がのこされていて、記録は充実しているが作品は少ないアートクラブとは好対照といえるかもしれない。

前章でもふれたように、二葉会は典型的なベス単派の芸術写真同好会である。結成当初の一九二二年頃は、まだ研展や浪華写真倶楽部（米谷紅浪[7]との交流があった）ふうの、光の諧調を生かした穏健な風景画や裸婦などが制作されていたが、次第にベス単によるソフトフォーカス、粒子画、さらにテフォルマシオンや「雑巾がけ」などの技法を駆使し『カメラ』『芸術写真研究』などの雑誌にしばしば登場するようになる。一九二四、二五年には、『カメラ』誌上で本田仙花が入賞年間一位に輝き、編集に携わっ

ていた中島謙吉も「大番狂わせ」という表現で、二葉会の躍進を讃えている。

しかし会報等の資料については、佐藤信が一九四三年頃、目野屋を辞める時すべて処分したといわれ、残念ながら今のところ存在を確認できない。会員のうち、特に活躍した作家としては、佐藤信、本田仙花、そして小関庄太郎である。また、小関より年上の会員として、伊東松葉、伊藤晨水、菊田蝶秋らがおり、ときおり『カメラ』『芸術写真研究』などに登場して、静物画などを制作していたことがわかる。また、小関と比較的近い世代の会員に伊藤弥十郎、金澤治男、三瓶秀三、島崎得之助などがいた。写真雑誌等への入選、掲載については、一九二四年頃から『カメラ』『芸術写真研究』に頻出し、一九三〇年代には『フォトタイムス』にいくらか掲載されるが、徐々に少なくなり、一九三六年以降、小関は雑誌発表をやめ、佐藤、本田も『月刊ライカ』等にたまに掲載されるものの、やや精彩を欠く内容となっている。

二葉会の他同体との交流は、いずれも断片的な証拠によるものであるが、以下の団体、個人との交流がわかっている。

1. 仙台の写真同好会（千葉仙、針生権六ら）→佐藤信の千葉仙への私淑、小閏所蔵印画に針生権六作品が含まれていること〈佐藤信資料、小関資料〉
2. 中嶋謙吉→一九二八年九月二八日に来福して例会参加、のち高揚温泉信夫屋に会員と泊まり、交流を深めている〈小関資料〉
3. 南賢治・椿本金三郎との交流→佐藤信、本田仙花、小関庄太郎との交流
本田は南、椿本の家を訪問し、南は一九三五年一〇月に来福、甲子温泉などに佐藤、本田、小関と泊まっている。また小関の手許に南と椿本の印画が残されている。

4. 日本光画協会←佐藤信が、一九二九年光画協会展に《河畔》を出品。ほか、小関が、山本、高山、田村と手紙等による関係をもっている。
5. 大宮表現社←名取久作らが撮影旅行で来福、このとき接触があったものと思われる（小関証言。小関所蔵の名取、萩原印画の存在、および大宮表現社例会記録帳の送付先に二葉会が見いだされること
6. 大阪地懐社←小関の証言によれば、地懐社から会報が送付され驚いたとのこと

【図40―68】

8. 小関庄太郎

小関は、福島商業学校卒業の一九二四（大正一三）年、近所の写真器材店・日野屋でベス単カメラを求め、福島二葉会で写真制作を行うようになる。同年末頃には、よりレンズの性能のよいドイツ製のヴェスト・ポケット・テナックスを買い求め、本格的な作品制作が始まる。一九二五年二月に撮影した《ふもとの家》【図69】は、中嶋謙吉が主宰する『カメラ』（アルス発行）一九二六年一月号の月例印画で第二部一等入選をはたしたデビュー作で、以後小関は『カメラ』『芸術写真研究』『フォトタイムス』に作品寄

稿や原稿執筆などを精力的に展開する。

彼のこの時代の特徴を、彼自身のまとめた文章（「私の作画生活を顧て」『芸術写真研究』一九三〇年七月号／「写真道終始一貫」『フォトタイムス』一九三五年一一月号）などを参考に要約すると、下記のような三期による区分ができる。

1．初期　一九二五年―一九三一年頃

技術の習得からはじまり、粒子画、デフォルマシオン、「雑巾がけ」といったこの時代のベス単派特有の技法を駆使して作画を行った時代。風景画が圧倒的に多く、まだ人物画にはさほど興味を示していない。この頃の作風は、二葉会の主宰者・佐藤信の圧倒的な影響のもとに形成されたと考えられ、じっさい高山正隆はじめほかの作家は、両者の見分けがつかないというようなことを述べている。

2．中期　一九三二年―一九三六年頃

一九三二年、小関ははじめて本格的な女性像制作にのりだす。「郷さん」という近所の女学生との出会いにより、「いっぱしの芸術家気取りでいた自分は、自分のためにモデルになってくれるのが当然だ」（本人談）という意気込みをもって、女性像の連作や自画像を執拗なまでに追い求めている。その記念碑的傑作は《二人像》（一九三二年六月頃）【図75】であり、ややかたい二人のまなざしの内に、青春期独特の不安感や異性へのあこがれといった感情をよみとることができる。

人物画以外にも、一連の都会風景連作にみられる洗練された作画というものが感じられ、制

作の充実をみることができよう。また、一九三六年は小関にとってもっとも制作に力を注いだ年であったようで、表現の多様さや作画数の多さは際だっている。この年、「自画像個展」「個展」という裏書きをもつ作品がいくつかみられるが、残念ながら会期会場等具体的な内容は不明である。また、雑誌『フォトタイムス』に記事連載を行っていたのもこの時期である。

3. 後期　一九三七年―一九四三年頃

制作のピークであった一九三六年以降、写真用品不足もあってか徐々に作品数は減少した。また一九三〇年代の新興写真、さらにそれに続く前衛写真、報道写真の盛り上がりにより、芸術写真は一部の雑誌をのぞき、あまり取り上げられなくなっていく。小関のお気に入り雑誌『フォトタイムス』においても、報道写真一色になって、以後小関は雑誌発表を行わなくなる。作品制作は続けているが、以前のような大胆な「雑巾がけ」による描画は影をひそめ、次第にモダンな風物に取材した郊外風景を制作するようになる。この頃には、カメラはライカとマミヤシックス、そしてコカレットなどを使っていたようで、レンズの描写性能なども作風転回に大きな影響を与えたものと思われる。

また、一九四四（昭和一九）年からは徴用のため神奈川県で軍需部品製作にあたっており、まもなく終戦を迎えることになる。小関はその後、第二次大戦後の一時期写真屋を営み、新たな仲間と写真同好会をつくりながら、九六年の天寿を、芸術写真家としてまっとうしたのである。

【図69―80】

9.　むすびにかえて

本稿では、一九一〇年代―二〇年代初期のアートクラブ、および二二年―四三年頃に活動した二葉会、および小関庄太郎について、概要をのべてきた。

アートクラブ写真部を牽引した富田不二夫、田村鐵三郎らは、一八八〇年代の生まれで写真館主がほとんど。一方二葉会は、一八九〇年代後半から一九〇七年生まれの小関庄太郎まで、若い年齢層で、商店主の子弟が多く、カメラはヴェス単などの小型カメラを使っていた。こうした世代のちがい、写真に対する考え方や取組のちがい、そして写真表現の変化とが重なり、新旧二つの会派という形にあらわれたとみられる。全国的にみても、こうした芸術写真の盛り上がりは、一九二〇年代以降にかなり顕著になってくる。一九一〇年代の好景気が産んだ、いわば「大正バブル」の申し子であろうし、小型カメラが安価で扱いやすくなったことも、写真普及を大きく後押しした。アートクラブと二葉会は、福島市における写真同好会であり、一九二〇年代はじめに新旧交代し、メンバーとしては二、三名をのぞいてほとんど重ならないが、断絶ばかりではないように思われる。一例として、富田不二夫の丹精こめたアルバム作りは、小関庄太郎に受け継がれたとみることも可能だろう[8]。

『日本の表現主義』『藝術写真の精華』展にみられるごとく、日本の芸術写真をとりまく国際的な評価の高まりは、単に「古くさい」「絵画的写真」という見方では片付けられず、むしろ日本独自の個性的表現で、新興写真などとの距離はさほど大きくはないとこんにちは再評価されている。中央と地方という構造で語られてきた日本近代の文化において、地方の事象を再発掘していくことは、こうした単純な文化普及構造の見直しにつながるとともに、中央集権的と考えられてきた文化醸成のあり方に一石を投

じるものとなるだろう。

そして、こうした研究を可能にしたのは、地域における写真資料の発掘と保全、研究を行ってきた、郷土史家やギャラリー、そしてご遺族などの存在があったからである。この場を借りて、故富田廣氏、故小関庄太郎氏、前谷由美子氏に感謝を申し上げたい。また、金子隆一氏、飯沢耕太郎氏をはじめ、竹葉丈、蔦谷典子、光田由里、白山眞理、中村恵一の諸氏、故石原悦郎、故足立朗氏にも深甚なる謝意を表したい。

研究課題はまだまだ山積している。福島県だけに限っても、福島市を中心とした県北地域だけでなく、いわき、郡山、白河、須賀川、会津などの他の地域の調査はほとんど手つかずで、また写真館や古写真などの調査も、満足に行えていない。また、福島でのこうした芸術写真の興隆は、他の地域との比較に於いてどのような特徴があるのか、ないのか。相対化して見るには、いまだ研究成果が過小すぎるといわざるをえない。

だが、稿者が小関庄太郎と二葉会（二〇〇〇年）、アートクラブ（二〇一三年）について展覧会や小企画で紹介したこと（特集展示「一〇〇年前の展示会―アートクラブから二葉会へ」二〇一三年）が呼び水になったのか、二本松市の、小屋をもたない青空写真館主・佐藤與のガラス乾板三〇〇〇枚が発見されて写真集が刊行されたり（『幻の田園写真家　佐藤與』高橋賢樹編、針道振興会、二〇二〇年）、喜多方・山都の素封家の撮影した大判ガラス乾板による岩越鉄道を中心とした記録写真がみつかったりと、新たな拡がりが生まれつつあるのも事実である。

研究はまだほんの端緒なのである。

福島県写真関連年表

一八八八・明治二一　磐梯山噴火。遠藤陸郎、岩田善兵衛らの写真師が撮影。
一九〇四・明治三七　会津に福島県工業学校開校。一九〇九年には若松市絵画展覧会開催。
一九〇七・明治四〇　福島、市制施行。堀江繁太郎、福島中学図画教諭に赴任。
一九〇八・明治四一　福島市で奥羽六県連合共進会。
　　県内初の大規模展覧会である美術展も開催される。
一九一〇・明治四三　福島市で油井夫山、富田不二夫らがアートクラブ結成。
　　四月一〇日に第1回研究会。
一九一一・明治四四　四月、アートクラブ第1回展「新古美術展」［福島市公会堂］。
　　二月より機関誌『アーテスト』刊行。
一九一二・明四五／大一　四月、アートクラブ第2回展［県会議事堂］。
　　二月より機関誌『ＬＩＧＨＴ　ＡＮＤ　ＳＨＡＤＯＷ』刊行。
一九一三・大正二　四月、アートクラブ第3回展［県会議事堂］。絵画部と写真部に別れる。
　　一〇月、アートクラブ第4回展［県会議事堂］。七月、夫山、夫山画荘を閉じ、のち黒波那研究所となる。
一九一四・大正三　このころ、ソフトフォーカス表現流行。
一九一五・大正四　四月、アートクラブ第5回展［旧税務署］。秋、黒波那研究所展。写真展示なし。

一九一六・大正五　九月、アートクラブ第6回展［旧税務署］。夫山、堀江繁太郎出品せず。写真展示なし。

一九一七・大正六　一〇月、アートクラブ第7回展［角長商店］。三日前急遽開催決定。堀江繁太郎、富田不二夫、大石苔寂、紺野三郎ら。

一九一八・大正七　二月、紺野三郎没（三三）。九月、アートクラブ第8回展［第二小学校］。紺野三郎遺作二二点、渡邊友章遺作二点展示。

一九一九・大正八　四月、第9回展を「奥羽美術展覧会」として開催［県会議事堂］。出品総数二三七点。賛助出品に今村紫紅、近藤浩一路、勝田蕉琴ら三三点、参考品として蠣崎波響、亜欧堂田善、横山大観、前田青邨ら展示され、大きな反響をよぶ。この年、福島県の在京日本画家による「福陽美術会」結成。

一九二〇・大正九　アートクラブ写真部は、新たに福島写真同好会となるか。機関誌『TANPOPO』発刊。

一九二一・大正一〇　五月、福島写真同好会、閑光会となるか。夏、閑光会アルバム刊行される。※写真雑誌『カメラ』（アルス）創刊。

一九二二・大正一一　一月、写真同好会「二葉会」が発足。四月『芸術写真研究』（アルス）創刊。六月、淵上白陽により『白陽』創刊。日本光画芸術協会発足。一一月、アートクラブ第10回展・閑光会第1回展開催［福島市公会堂］。写真五一点を含め一〇〇点以上の陳列か。この年アートクラブは解散したか。

一九二三・大正一二　一一月、福島洋画会第1回展開催［福島高等女子師範学校］。古屋亮寿、佐藤湊、佐藤二郎、池田龍一、小池亮一、阪本勝ら。油井夫山、富田不二夫も参加したが、ほどなく活動の一線からは身を引く。
※九月関東大震災。

一九二四・大正一三　『フォトタイムス』創刊。

一九二六・大正一五　六月、第1回アルス写真展［東京・松屋］に、本田仙花、伊東松葉、小関庄太郎、佐藤信が出品。『アサヒカメラ』創刊。大阪毎日主催、日本写真美術展はじまる。

一九二七・昭和二　三月、第2回アルス写真展［東京・松屋］に、本田、小関、佐藤信が前年に続いて出品。

一九二八・昭和三　三月、山本牧彦ら日本光画協会発足。一〇月、淵上白陽、渡満。

一九二九・昭和四　四月、日本光画協会展［大阪朝日会館］に佐藤信《河畔》《早春暮景》を出品。一一月、油井夫山個展［県立図書館］。『芸術写真研究』光大社より復刊。

一九三〇・昭和五　七月、伊藤彌十郎、第一回山の写真展覧会［福ビル］を開く。一一月、福島県初の全県洋画組織、福島美術協会発足、第1回展［福島市公会堂］。飛田昭喬、伊藤幟、高橋卯八、佐藤二郎ら。
※関西で「丹平写真倶楽部」「芦屋カメラクラブ」結成。

一九三一・昭和七　五月『光画』創刊。伊奈信男「写真に帰れ」掲載。一〇月、『フォトタイムス』一〇月号に佐藤信の名で小関庄太郎《二人像》が

掲載される。

一九三四・昭和九　この頃、日本光画協会終息するか。一〇月日本工房『ＮＩＰＰＯＮ』創刊。

一九三五・昭和一〇　一一月二―四日、聯合藝術写真展（郡山津野百貨店）。福島二葉会、須賀川曙会、若松表現社、郡山光画倶楽部の四団体。詳細不明。

一九三六・昭和一一　小関、指をケガし、《ホータイの男》を制作。個展を開催したか。

一九三八・昭和一三　『写真週報』創刊。

一九四三・昭和一八　この頃、日野屋は材料の不足から写真を扱わなくなる。店長佐藤信は二葉会の資料を処分したという。

一九四四・昭和一九　小関庄太郎、徴用で神奈川県秦野の軍需工場で働く。

1 磐梯山噴火の写真については、下記の考察がある。
千葉 茂樹、佐藤 公「宮内庁所蔵、磐梯火山一八八八年噴火の写真（Ⅱ）」『地球科学』63巻（二〇〇九）二号 pp. 七七―九三
https://www.jstage.jst.go.jp/article/agcjchikyukagaku/63/2/63_KJ00005422021/_article/-char/ja/
※遠藤陸郎撮影の写真は、福島県立図書館　デジタルアーカイブ　でダウンロードが可能。
https://www.library.fcs.ed.jp/（サイト内検索…磐梯山噴火写真）

2 本稿はおもに下記参考文献に拠った。
・『福島の近代美術』村山鎮雄　三好企画　一九九二年
・『福島近代洋画の曙と「アートクラブ」の変遷』磯崎康彦編　福島市　一九九三年
・『光のノスタルヂア―小関庄太郎と日本の芸術写真』（図録）堀宜雄編　福島県立美術館　二〇〇一年六月
・『躍動する魂のきらめき―日本の表現主義』森仁史ほか　東京美術　二〇〇九年一〇月
・『藝術写真の精華』（図録）東京都写真美術館編　二〇一一年三月
・『特集展示　一〇〇年前の展覧会―アートクラブから二葉会へ 一』（簡易パンフレット）堀宜雄編　福島県立美術館　二〇一三年一月

3 福島市は一九〇七年に市制施行された。市内の近代建築について、主要なものをあげると次のようになる。残念ながら、遺存するものはなく、『写真集ふくしま一〇〇年』福島民報社　一九八七年などの文献よりその姿を偲ぶのみである。
○福島監獄　一八八二年／明治一五　○信夫橋（二代目）　一八八四年／明治一七

○勧工場　一八九八年／明治三一　○県会議事堂　一九〇一年／明治三四
○福島県農工銀行　一九〇七年／明治四〇　○県庁舎　一九〇七年／明治四〇
○福島県物産館　一九一一年／明治四四　○日本銀行福島支店　一九一三年／大正二
○福島市公会堂　一九一七年／大正六　○福ビル　一九二七年／昭和二

4 『奥羽六県連合共進会鳥瞰図』一九〇八年　県立図書館蔵
『奥羽六県連合共進会』一九〇八年　県立図書館蔵

5 「奥羽六県連合共進会美術展覧会」『福島民報』一九〇八年五月二六日　鈴木写真館撮影
美術展出品点数は、『福島民報』一九〇八年四月二三日「美術展覧会開会式」に、「出品総点数は八百三点にして内古画五百三十八点、新画二百三十五点なりき」とある。
目録は、村山鎮雄『福島の近代美術』に一部掲載。

6 二葉会の展覧会としては、本田仙花資料にある「冬山の写真展」が開かれたらしいことがわかるが、会場や開催時期は未詳である。
県内の他団体との共同展覧会が開かれたことがわかるが、これも詳細は未詳。
展覧会：「聯合芸術写真展覧会」一九三五年一一月二一日　四（郡山津野百貨店楼上）
※郡山光画倶楽部、若松表現社須賀川曙会との三市一町合同展（『アサヒカメラ』雑報欄、『福島民報』一九三五年一一月三日「郡山通信」記事により開催が確認できる）
出品者名　古寺喜太郎、橋本信夫、明石田周一、古川秀次、佐藤信、小関庄太郎、金澤治男、三瓶隆造［秀三の誤り］、伊藤晨水、本田仙花、井上幾久雄、佐藤元吉、有江雄三、中谷信太郎、渡邊健次、

佐々木緑男、野川勝司、大沼光、鈴木正雄、服部稔、阿部仁平、塩谷俊平、本名徳治、三浦健治、浅香芳露、古川兼重、田原登、今井、山口繁太、伊東省三、三沢昇三、星田茂雄、小島武男、岡部栄助、古川虎之助、川俣善四郎。（『アサヒカメラ』より）

7 米谷紅浪（一八八七―一九四七）

8 富田は記録性を重視しつつも、趣味の良いアルバムや雑誌づくりを行った。小関も数多くのアルバムや切り抜き帳を暇さえあれば作っていた。写真にぎざぎざの色台紙をあて、それをアルバムに貼り込むやり方も踏襲している。むろん、時代の流行でもあったスタイルだが、小関が「白根屋さん」と店の屋号で呼んでいた富田不二夫は、佐藤信や本田仙花と直接交流があったにせよ、小関とはあまり面識がなかったはずである。小関の手製アルバム作りは、富田の影響によるものと考える方が自然である。

アートクラブ―閑光会における写真作品（富田不二夫資料中の目録より抜粋）

第1回展　一九一一（明治四四）年四月二三日―二四日　於県会議事堂　写真：二三点

田村鐵三郎作　一五点

《逆光肖像》（カーボンブロマイド）、非賣品／《ポートレートスタデイ》（プラチナマットブロマイド）、

同／《刺客》（アリストプラチナ）、同／《ながし》（アリストプラチナ）、

同／《ラインライト》（カーボンブロマイド）、

同／《肖像》（プリンチングアウトペーパー）同／《墓場》（アリストプラチナ）、

同／《社後（稲荷社）》（プラチナマットブロマイド）、

同／《水門（腰の濱）》（同）、同／《木立》（同）、同／《逢隈河畔》（同）、同／《摺上川の朝》（同）、

同／《冬枯》（同）、同／《西斑牙（スペーイン）婦人》（カーボン）参考品／《婦人》（アーチラ）、同

富田藤太郎作　八点

《あこがれ》（マットアルビューミン）、非賣品／《春日和》（カーボンタイプ）、

同／《足尾銅山》（カーボンブロマイド）、

同／《セーレース夫人》（マットブロマイド）成畫／《おさげ》（テアコツタカーボンチツチュ）、

同／《飯島氏》（ベルペット子ペラ）、同／《獨乙風景》（アーチュラ）、

参考品／《ナークデーの美》（アーチュラ）、同

第2回展　一九一二（明治四五）年四月二三日―二四日　於県会議事堂　写真：六〇点

富田藤太郎作

《大理石》（スペシアルスムース）五〇／《自畫像》（同）非賣品／《スタデオライト》（同）

六／《午後の日》（同）非賣品／《轍の跡》（同）五／《職工》（同）五／《晩の仕度》（同）

六／《日和》（同）五／《深き思ひ》（荒面）五／《オレンヂ雲》（同）

五／《サンセット》（ピーオーピー）一／《手術》（スペシアルスムース）五　一二

金田駒治作

《雨の道》（ブロムオイル）非賣品／《梅雨》（同）一五／《雨中の釣》（同）

七／《避村》（同）非賣品／《木蔭》（同）一〇／《田舎家》（荒面セピヤ）非賣品／《睦み》（同）

同／《靄》（同）五〇／《夕暮》（荒面）三／《泊船》（ガーボンプロセピヤ調）二〇／《山路》（同）

三／《洋上のかもめ》（同）七／《牧牛》（オイルプリント）非賣品／《雨の街》（ゴム印畫）

同／《水車》（臭素紙）一五／《靜物》（ピーヲーピープリウ調）一／《靜か》（臭素紙）一　一七

田村鐵三郎作

《ライトスタデー》（プラチナ、マット、ブロマイド）非賣品／《ポートレートスタデー》（同）

同／《老人》（同）同／《逆光肖像》（同）七／《遠廻し》（同）同／《舞すがた》（同）

一五／《ほゝえみ》（同）同／《すさび》（エキトラ、ラツフ、ブロマイド）

非賣品／《夜のステーション》（同）　五〇／《月光》（同）三五／《汀》（同）一五／《松齡橋を望む》（同）

一五／《うす氷》（同）七／《田舎家》（同）七／《さみしき光》（アリストプラチナ）非賣品　一五

鈴木金次郎作《お年はいくつ》（スペシアルスムース）一〇／《暁霧》（同）
五／《猫の影隣は梅の盛かな》（スペシアルスムースセピア調）
六／《雨後の花》（カーボンブロマイドセピア調）大石苔寂藏／《山里》（同）
非賣品／《夕陽》（同）二／《隙る光》（プムオイル）非賣品／《ピント焦點の美》（同）
同／《土産の桃》（フィルタイプ）同／《秋の空》（エキストララツフ）
一二／《寒き流れ》（同）非賣品／《怒濤》（同）四／《朝霧》（スペシアルラツフ）
六／《春の水》（ゴム寫眞）一〇／《黄昏》（同）三／《南枝の一輪》（カーボンブロマイド）一〇　一六

第3回展　一九一三（大正二）年四月二三日―二四日　於県会議事堂　写真：四九点
田村鐵三郎作
《花と花　（六種）》オートクローム天然色寫眞　非賣品／《誘惑》イキストラ、ラフ
同／《零落》同　同／《尺八》同　同／《風景》同　同／《ポートレートスタデー》アート、ブロマイト
同／《小兒》同　同／《ポチシヨンスタデー》アリスト、プラチナ　同　八
金田北勝作
《よはき日》イキストラ、ラフ　五圓／《みぎは》臭素紙　三圓／《濁れる空》
同　五圓》／《むら》護謨印畫　非賣品》／《牧場の夕》ブロムオイル　三圓　五
富田香雪作
《歸帆》非賣品／《五月の山》同／《上流》同／《戸山原》同／《鹿島の杉》

同／《護謨印畫色調（十六種）》同　六

鈴木紅雨作

《薄寒き日》イキストラ、ラフ　五圓／《白連》臭素紙　三圓／《春淺し》同　三圓／《日光》同　二圓／《新綠》ゴム印畫　非賣品／《ポプラ》同　同／《白い藏》同　一圓　七

渡邊湖月作

《寒空》臭素紙　三圓／《冬日和》同　二圓／《清き流れ》同　非賣品／《殘れる雪》同　同／《せきとめ》同　三圓　五

松本嘉一郎作

《冬木立》臭素紙　三圓／《一本橋》同　非賣品／《交通機關》同　同／《湖畔》同　二圓／《水車》同　二圓　五

庄司市三作

《寫る影》臭素紙　非賣品／《春の午後》同　同／《のどけき春》同　五圓／《清流》同　三圓　四

本間貞一郎作

《田舍道》臭素紙　三圓／《宿場》同　非賣品　二

大沼孫兵衛作

《枯木拾ひ》ベルブロ　非賣品／《番頭と小僧》同　同／《姉さんはこうして》同　同／《雜木林》同　同／《春日和》同　同　五

三浦竹二作

《森の路》非賣品／《習作》同　二

第4回展　一九一三年一〇月三日―一〇日　於県会議事堂　写真：四六点

田村鐵三郎筆

《牧場》（イキストララッフ）　非賣品／《ひなた》同　同／《橋》同　同／《鍛治屋》同

同／《笑》（アート紙）　同／《提灯》同　同／《もる火影》同　同／《雨の朝》同

同／《日暮》（ゴム印畫）　同／《小印畫數千種》（ピーオーピー）　同／《里》（アート紙）

同／《小春日和》（アリストプラチナ）　同／《水影》同　同／《海賊》同　同／《山中》（コスモス）

同／《アラー》同　同　一六

富田香雪作

《水の精》（同イキストラ、ラフ）　非賣品／《村の少女》（ブロムミルク）　同／《驛路》（イキストララフ）

同／《靜かな路》（ブロムミルク）　同／《影》（コスモス）

同／《冬日和》（ゴム印畫）　／《沈床》（コスモス）　同／《午後》同　同／《米とぎ（其一）》（ピーオー）

同／《米とぎ（其二）》同　同／《馬車》同　同／《牡丹見》同　同／《春の小川》同　同　一三

鈴木紅雨作

《雨後の暮》（イキストララフ）　非賣品／《朝ばれ》（ブロマイド）　同／《宿場》（ブロムオイル）

同／《雨の街》（ゴム印畫）　同／《ゆく春》同　同／《初夏》（カーボングリーシ）　同／《堀の影》（セルトナ）

同／《雨》（ピーオー）　同／《長閑》同　同／《町からの歸り途》同　同　一〇

渡邊湖月作

《静か》（ブロマイド）　非賣品／《木蔭の清流》同　同／《坊ちやんわこうして》同

同／《裏のよどみ》同　同　四

金田北勝作

《雨の小川》（カーボングリーン）　鈴木蔵／《地晴れ》同　同／《春寒む》同　同　三

第5回展　一九一五（大正四）年四月二三日―二五日　於　旧税務署跡　※写真作品出品なし

第6回展　一九一六（大正五）年九月二三日―二四日　於旧福島税務署跡　※写真作品出品なし

第7回展　一九一七（大正六）年一〇月九日―一一日　於角長商店　※写真作品出品なし

第8回展　一九一八（大正七）年九月二二日―二四日　於福島市立二小　※写真作品出品なし

第9回展　一九一九（大正八）年四月二六日―二八日　於県会議事堂　写真：一五点

田村凹眼

《ぼっちやん（二種）》非賣／《おじようさん》同　同／《肖像（三種）》同　同／《老人肖像》同

同／《二様の顔》同　同／《朝》同　同／《狩》同　同／《渡舟》同　同／《立姿二様》同　同／

鈴木紅雨

《静かな午後の日》同　同／《秋日和》同　同／《街道》同　同／《みち》同　同／《春光》同　同

東京・淺沼商會《婦人》同

第10回アートクラブ美術展覧會／第1回閑光会寫眞展覧會

一九二二（大正一一）年一一月一八日―一九日　於福島市公会堂　写真：五一点

本田仙花

《ステーションの朝》《春の小川》《フレンド》《雲晴れ》《淡きかなしみ》《失題》六

菊田蝶秋

《なやみ》《秋雨》《秋の陽》《静物》《浅木山》五

渡邊秀光

《離れゆく心》《静物》《午後の陽》《淡き光》《小春日和》《酒蔵》《麓の家々》《女》《河岸情景》《日本橋》《斜陽》

《祈り》一二

管野葉雅

《奥山の秋》《市場に出る前》《讀書》《たき火》《シュロの家》五

大河内虹泉

《秋の流れ》《静物》《日永》三

長澤碧洋

《秋の流れ》《舟》《少女》三

坂東直幹

《雪の街》一

鈴木敏夫

《工場の裏》《静物》《張物》《ながし》《磯の街》《洗濯》《麓の朝》七

富田不二夫

《落穂拾ひ》《くも》《もゆる思ひ》《白衣の人》《洗濯》《春日》《南風》《午後の日》《奥山の朝》九

『閑光会アルバム』

1号の封筒にローマ字で記される内容は以下のとおり。

閑光会　趣味の写真　毎年四回発行　春－夏－秋－冬　毎号写真二〇枚

通巻第1号　夏の巻　福島　中町　閑光会発行　創立一九二一－五月

福島市中町は富田不二夫をはじめ、アートクラブ会員が数多く住んでいた場所である。

閑光会アルバム　掲載作品一覧（号／アルバム寸法／刊行時期：番号／作家名／作品名／印画寸法 mm）

1号　1921夏　250×290mm

1　管野葉雅　晩帰　95×55
2　坂東善吉　外光　70×50
3　竹藤一露　洋館の前　93×69
4　渡邊秀光　滞船　40×63
5　富田不二夫　その・夕べ　52×75
6　佐藤　信　夏の朝　85×66
7　鈴木紅雨　蔵　61×38
8　竹藤一露　葵の蔭　94×70
9　鈴木紅雨　朝仕事　69×95
10　佐藤　信　雨の日　93×62
11　富田不二夫　三河尻　100×70
12　長沢松太郎　汐の音　51×75
13　富田不二夫　初夏　69×94
14　長沢岩次郎　三味の女　69×94
15　小島　勝　清水　94×69
16　渡邊秀光　静かな朝　41×64
17　鈴木紅雨　もや淡き朝　71×92
18　本田仙花　盛夏の頃　42×47
19　大河内正七　水郷　94×69
20　浅井武司　すだれ　93×70

2号　1921秋　247×281mm

1　鈴木紅雨　白壁　134×95
2　竹藤一露　憩ひ　94×70
3　大河内正七　秋のおとずれ　94×70
4　佐藤　信　朝　99×74
5　渡邊秀光　小春日和　100×71
6　長沢岩次郎　川辺　78×94
7　富田不二夫　秋色　94×70
8　管野葉雅　門のほとり　94×70
9　坂東善吉　はらから　53×74
10　本田仙花　子守　62×41
11　長沢岩次郎　失題　63×41
12　坂東善吉　汐の音近し　76×53
13　菊田長三郎　秋の陽　95×70
14　富田不二夫　駅路　102×148
15　鈴木紅雨　うらぐち　95×132
16　鈴木紅雨　晩秋　95×133
17　管野葉雅　秋雨の街　94×70
18　渡邊秀光　秋の朝　94×70
19　竹藤一露　逍遙の女　63×41
20　長沢松太郎　立秋の日　53×66

3号　静物の巻　1922　250×290mm

1　本田仙花　京人形　121×91
2　渡邊秀光　花　75×92
3　佐藤嘉重　ナイフと柿　69×93
4　渡邊秀光　花瓶　78×98
5　菊田長三郎　台所ニテ　71×95
6　佐藤　信　写真器　81×69
7　富田不二夫　人形　94×69
8　大河内正七　ザクロ　70×93
9　管野葉雅　ブドウ　70×93
10　浅井武司　柿　95×72

4号　人物の巻　1922　251×295mm

1　佐藤　信　ポートレート　135×105
2　富田不二夫　白衣の人　94×71
3　渡邊秀光　春宵　97×73
4　本田仙花　もゆる心　157×111
5　佐藤　信　肖像　138×77
6　渡邊秀光　心のゆくゑ　100×75
7　菊田長三郎　こたつ　72×60
8　渡邊秀光　祈り　94×70
9　本田仙花　淡きかなしみ　111×157
10　富田不二夫　活字の匂ひ　96×138

5号　1922冬の巻　250×297mm

1　富田不二夫　鹿島の杉　139×97
2　長沢岩次郎　ある日　62×51
3　菊田長三郎　冬日影　95×72
4　本田仙花　冬の流れ　111×155
5　KS生（参考品）　場末の午後　97×138
6　富田不二夫　残雪　71×95
7　渡邊秀光　酒倉　97×76
8　本田仙花　冬の午後　128×88
9　鈴木敏夫　雪路　58×75
10　管野葉雅　冬日和　72×94

6号　1922春の巻　250×293mm

1　本田仙花　岸辺　151×110
2　大河内正七　日永　93×73
3　鈴木敏夫　日向　94×72
8　本田仙花　白い蔵　151×115
9　富田不二夫　FF君　95×72
10　管野葉雅　影　94×72

4　富田不二夫　雨後のゆうぐ　96 × 139
5　長沢岩次郎　春の曲？　72 × 95
6　菊田長三郎　新緑　79 × 71
7　渡邊秀光　小雨の街　101 × 69

7号
1922　240 × 290mm

1　本田仙花　春の小川　138 × 108
2　鈴木敏夫　洗濯　149 × 112
3　渡邊秀光　離れゆく心　136 × 104
4　渡邊秀光　静物　106 × 136
5　富田不二夫　洗濯　98 × 136
6　渡邊秀光　女　136 × 104
7　長澤碧洋　秋の流れ　138 × 101
8　坂東善吉　雪の街　106 × 128
9　本田仙花　ステーションの朝　109 × 144
10　大河内虹泉　静物　99 × 133
11　富田不二夫　春日　102 × 137
12　管野葉雅　奥山の秋　144 × 111

11　本田仙花　日さし　55 × 45
12　富田不二夫　午後　100 × 75
13　大河内正七　静寂　54 × 73
14　富田不二夫　静かな日　72 × 94

13　長澤碧洋　舟　101 × 137
14　富田不二夫　南風　127 × 98
15　本田仙花　雲晴れ　139 × 105
16　鈴木敏夫　静物　105 × 141
17　菊田蝶秋　なやみ　104 × 142
18　大河内虹泉　秋の流れ　141 × 107
19　渡邊秀光　日本橋　136 × 91
20　鈴木敏夫　工場の裏　112 × 152
21　富田不二夫　落穂拾ひ　97 × 151
22　本田仙花　フレンド　143 × 98
23　渡邊秀光　小春日和　137 × 107
24　富田不二夫　奥山の朝　102 × 136

8号　1923春　250×293mm

1　菊田長三郎　BIRU・NITE　156×110
2　長沢岩次郎　工場　105×149
3　大河内正七　春さむ　85×158
4　本田仙花　鏡石ニテ　115×113
5　渡邊秀光　木場　95×118
6　本田仙花　朝ぎり　＊×＊
7　菊田長三郎　午后三時　149×107
8　長沢岩次郎　寂春　84×158
9　富田不二夫　村の女　110×148
10　富田不二夫　カフェーの女　152×102

福島県関係写真家略歴（アートクラブ～二葉会）

富田不二夫　TOMITA　Fujio

（一八八六―明治一九年八月三〇日―一九八二―昭和五七年八月二六日）藤太郎、藤五郎、不二雄とも称し、別号に香雪（かせつ）。福島町字中町、白根屋紙店の三代目として生まれる。一九〇〇（明治三三）年頃上京し、本郷の長谷川写真館に学び、また川端画学校にも通うという。一九一〇年頃帰郷、油井夫山らと福島県初の美術団体「アートクラブ」を結成する。本業の紙屋の利点を生かしてぜいたくな出版物を製作するとともに、経済的にもアートクラブの活動を支えた。写真は、風景と女性像を得意とし、重厚なゴム印画などにも挑戦している。一九二二年のアートクラブ解散後は、写真愛好会・閑光会と福島洋画会に加わるが、一九三〇年代以降は発表を行わず、園芸、熱帯魚などの趣味に生き、九六年（数えでは九七歳）の長寿を全うした。

田村鐵三郎　TAMURA　Tetsusaburou

（一八八六―一九七四）

別号：凹眼。田村写真館の女婿。福島県写真帖を撮影（一九〇八、一九一六、一九二四年に刊行、いずれにも関わっている）。洋画も描く。

佐藤　信　SATO　Makoto

一八九七（明治三〇）年一〇月六日―一九八七（昭和六二）年一月二四日

東京で生まれ、育ったと考えられる。一九一二（大正元）年、父が病没して府立中学を中退し、上野の岩倉鉄道学校に進む。鉄道機関士となり、福島藤田線を受け持つ。在学中の一〇代の頃から写真に親しみ、一九二〇（大正九）年頃には、写真の腕を請われて福島市の写真材料店日野屋商店の店長となる。写真家としての活動は、一九二〇年頃からで、福島写真同好会、閑光会に加わり、一九二二年一月頃、写真同好会「二葉会」を本田仙花らと結成する。実質的な二葉会の主宰者であり、彼の勤める日野屋二階が二葉会のたまり場であった。二葉会では月例会による作品批評を佐藤が行っていた。以後戦争が激しくなる一九四三（昭和一八）年頃まで二葉会を通じて作品を発表したり、小関庄太郎をはじめとする後進の指導に力を尽くした。

一九二四年以降『カメラ』『芸術写真研究』『月刊ライカ』などにたびたび作品を発表し、『カメラ』九―八号（一九二八年八月）には特集が組まれている。仙台の千葉仙の作風に大きな影響を受け、はじめ大伸ばしによる荒い粒子を特徴とする「粒子画」による風景画や人物像を制作し、のちテフォルマシオンによる《都会》(cat.no.I-57）のような表現を生んでいる。日本光画協会展にも一九二九年展に《河畔》、《早春風景》を出品している。一九三〇年代には谷脇龍の別名による発表も確認される。第二次大戦後は、一時写真現像店を営んだが長続きせず、写真からは遠ざかっている。

本田仙花　ＨＯＮＤＡ　Ｓｅｎｋａ

一八九七（明治三〇）年三月二七日―一九五一（昭和二六）年九月八日

福島市中町一九番地に生まれる。本名彦之助。家は裕福な質屋であった。

白石中学卒業後、家業を手伝いながら一九一九（大正八）年頃から写真をはじめる。一九二〇年の福島写

真同好会雑誌『TANPOPO』に作品が掲載されているのが、現在確認できる初出である。一九二二（大正一一）年一月、佐藤信らと「二葉会」を結成する。以後佐藤と二葉会の中心となって精力的に作品を発表する。一九二四年以降『カメラ』『芸術写真研究』誌に毎号のように作品を発表、常連として知られるようになり、一九二四、二五年には『カメラ』誌入選第一位となっている。ソフトフォーカスによる静謐な静物画や、おそらく仙台の千葉仙を介して影響を受けた淵上白陽をはじめ「日本光画芸術協会」にみられる「構成派」的表現もみられる。また風景にも独自の抒情性を宿す。一九三〇年代には、『月刊ライカ』などにも作品を発表している。

二葉会以外に交遊のあった作家としては、柳勇吉、関内の南賢治、椿本金三郎がおり、奈良に南を訪ねたり、柳のライカの会にも呼ばれていたようである。戦時色が濃くなって一九四三（昭和一八）年以降二葉会は休止状態となり、本田自身の活動も逼塞していったと考えられる。戦後まもなく脳溢血により急逝する。

氏家健吉　UJIIE　Kenkichi

生没年不詳

略歴未詳。小関の証言では、梁川町出身で早世としたという。小関所蔵印画等により、福島の二葉会に属し、写真制作を行っていたことが確認される。

菊田蝶秋　KIKUTA　Choshu

生年不詳―一九三〇年頃

略歴未詳。佐勝信らよりもやや上の世代と思われる。二葉会の前身、閑光会アルバム所載の菊田長三郎と同一人物とすれば、一九二一（大正一〇）年には作品発表を行っていたことになる。一九二二年秋の第1回閑光会展には、東京写真研究会展（研展）ふうの裸婦を出品しており、アートクラブから続く福島の写真同好会の古参の一人であったと思われる。二葉会の創立会員で、『カメラ』『芸術写真研究』『アサヒカメラ』などの写真雑誌に、静物を中心とした作品がたびたび入選している。『芸術写真研究』七―八号（一九三〇年九月二六日発行）には「故」と記され、この頃没したと思われる。

村山俊吾　ＭＵＲＡＹＡＭＡ　Ｓｈｕｎｇｏ

生没年不詳

略歴未詳。小関所蔵印画により、福島の二葉会に属し、写真制作を行っていたことが確認される。

川村重和　ＫＡＷＡＭＵＲＡ　Ｓｈｉｇｅｋａｚｕ

一九〇一（明治三四）年一一月一日―一九八八（昭和六三）年一〇月五日

福岡県出身。東京外国諸学校仏語部卒業後、一九二二（大正一一）年より福島高等商業学校に招かれてフランス語と英語を教授し、以後福島経済専門学校、戦後は福島大学経済学部で教鞭を執り、一九六六（昭和四一）年に退職した。のち福島大学初の名誉教授となる。小関所蔵印画等により、福島の二葉会に属し、写真制作を行っていたことがわかる。

島崎得之助　SHIMAZAKI　Tokunosuke

生没年不詳

略歴不詳。小関の証言によれば、米沢で運送業に携わっていたという。二葉会に属し会の中では珍しく、ブロムオイル印画をてがけたことがある。小関所蔵印画等により、福島の二葉会に属し写真制作を行っていたことが知られる。

伊藤弥十郎　ITO　Yajuro

一九〇三（明治三六）年二月二二日―一九七七（昭和五二）年九月六日

福島市本町の老舗蕎麦屋、喜多屋の第十子（五男）として生まれる。一九一八（大正七）年福島商業学校卒業。登山、スキーが趣味で、小関や本田仙花にしばしば同行している。山の写真を集めた個展を一九三〇（昭和五）年七月に福ビルで開催した。翌年には小関らと『吾妻・磐梯一五色・沼尻』という山岳案内書を刊行している。一九三〇年には日本山岳会員となり、その後一九三六年以降は福島で自動車販売会社や、沖電機などに長く勤める。福島県山岳連盟を組織してその初代会長を務めるなど、登山家としての功績により勲五等瑞宝章や福島市体育功労賞などを受けている。没後の一九八〇年には、生前の山日記をもとに『アッシュの杖』（日本山岳会福島支部発行）という追悼文集が上梓された。

金澤治男　KANAZAWA　Haruo

一九一三（大正二）年四月一六日―一九三九（昭和一四）年一二月一六日

福島市栄町に生まれ、生後すぐ置賜町で荒物をあつかう加賀屋金澤商店の金澤治介の養子となる。福島商業学校卒業後、家業のかたわら二葉会に属し、写真撮影やスキーなどにしばしば同行している。出品作品《晩夏の風景》(cat.no.I-69) は『フォトタイムス』に掲載され、また一九三五（昭和一〇）年一一月の聯合芸術写真展に出品されていることが、小関のメモにより判る。さらに、小関の自画像連作の一部を撮影するなど、とても近しい存在であった。結核により二六歳で早世した。死後小関により遺作アルバムが編まれている。

吹澤龍一　ＦＵＫＩＺＡＷＡ　Ｒｙｕｉｃｈｉ

一八九三（明治二六）―一九四一（昭和一六）

福島市に生まれる。新潟医専を卒業、一九三三年小児科医を開業。一九二〇年代に二葉会に加わったと考えられ、小関庄太郎の所蔵印画に《停車場》一九二六年がある。

小関庄太郎　ＫＯＳＥＫＩ　Ｓｈｏｔａｒｏ

一九〇七（明治四〇）年一月二五日―二〇〇三（平成一五）年三月二〇日

福島市置賜町の古着・呉服をあつかう小関屋の長男として生まれる。一九二四（大正一三）年福島商業学校卒業後、近所の写真材料店日野屋でベス単を求め写真同好会二葉会に入会し、写真をはじめる。翌年にはドイツ製のベストポケットテナックスを新たに求め、制作が本格化する。一九二六年一月に《ふもとの家》が『カメラ』に初入選し、以後、同誌や『芸術写真研究』を中心に活躍し中嶋謙吉の説く「自然との融和」に深く傾倒する。一九二九年、一時休刊していた『芸術写真研究』が復刊されると同誌に発表の舞台を移し、

さらに一九三〇年代には田村栄編集の『フォトタイムス』にも作品や技法の原稿を発表する。

初期は佐藤信の影響濃い風景画が多く、地方色をふんだんにもりこみながら、ぶれや粒子の荒れ、さらにデフォルマシオンなどの技巧をもちいている。一九三〇年代にはいると、人物画が大きなモチーフとなってくる。一九三二（昭和七）年から一九三六年がその高揚期であり、もっとも表現者としての充実がうかがえる。執拗な自画像制作が注目され、またヌード作品も登場し、その代表作というべき《二人像》（cat.no.I-69）は、小関の中期の特質がよく発揮されている。修整も大胆になり、自画像による個展を開催した一九三六年は、制作数もピークをむかえ、「雑巾がけ」といわれたレタッチとテフォルマシオンによる過剰ともいえる表現のとりこになった。しかし新興写真の高まりとともに、小関は雑誌発表をやめ、一九三七年以降は、モダニスム的造形を意識した《海辺夕景》や《夕照》などの作品が登場するが、次第に写真材料の欠乏などにより制作は中座した。戦争末期には一年ほど徴用で川崎、秦野で工員となる。

第二次大戦後は古物商と写真現像を行うが、店は妻にまかせ、一九四七年頃から写真を再開した。一九五一－五五年頃まで同好会「アンポ倶楽部」で展覧会を一〇同程度行うが、雑誌発表等は行っていない。一九八四年に『光跡六〇年　小関庄太郎写真集』を、また四年後にも『光跡六五年　小関庄太郎写真集』を自費出版し、さらに一九九七（平成九）年から二〇〇〇年まで、朝日新聞福島県版に「小関庄太郎の光跡三／四世紀」を連載し、注目された。一九七七年、福島県写真連盟展審査のため来福した植田正治は、小関の印画を「発見」し、植田のすすめもあって、一九九二年東京都写真美術館に作品五六点が収蔵され、また「日本のピクトリアリズム」展（一九九二）「日本近代写真の成立と展開」「モダニズムの時代」（いずれも一九九五）、「藝術写真の精華」（二〇一一）でたびたび紹介されている。二〇〇三年、九六歳にて没。

1908 年　奥羽六県連合共進会

※

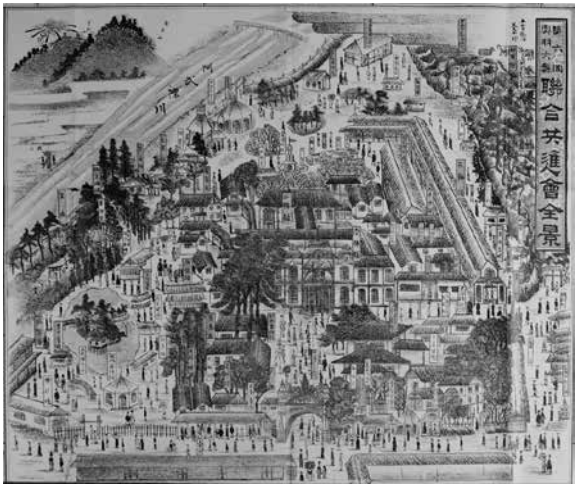

図 1　『奥羽六県連合共進会鳥瞰図』
1908 年　福島県立図書館蔵

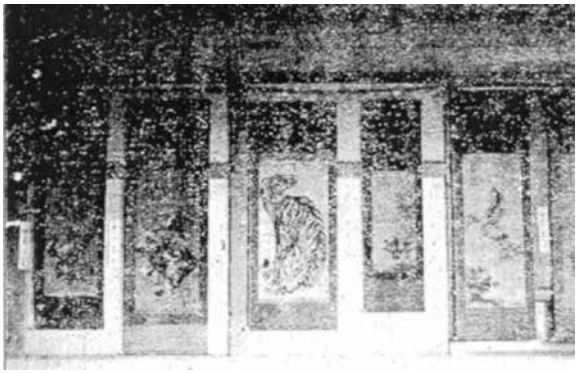

図 2　「奥羽六県連合共進会美術展覧会」『福島民報』
1908 年 5 月 26 日

図 1，2：『特集展示 100年前の展覧会 アートクラブから二葉会へ』
福島県立美術館 、2013年 より転載

1911年　アートクラブ第１回展

図3　「新古美術展覧会　会場写真」
（『四十四年の春』（展覧会記念写真帖））所収
1911年4月　第１回アートクラブ展（新古美術展覧会）祝宴の記念写真
「一品会とアートクラブの慰労会」於中常　（『アーテスト』5号掲載）前列右から2人目田村鐵三郎、大石源太郎、紺野三郎、富田不二夫、佐藤彦太郎、堀江繁太郎。前列一番左：服部保一。後列右より2人目：油井夫山、一人おいて小檜山農夫雄（福島中学教諭、勝田蕉琴兄）

図５　1911年４月
第１回アートクラブ展会場
（市公会堂）

図４　1911年４月
第１回アートクラブ展
写真の部

1912 第２回展

図６　1912 年４月
第２回アートクラブ展（洋画の部）

図７　1912 年４月
第２回アートクラブ展会場（県会議事堂）

図８　1912 年４月
第２回アートクラブ展（写真の部）

アートクラブの刊行物

図９　アートクラブ
『展覧会記念写真帖』
1911 ～ 1920 年
18.5 × 26.5cm

図 10
アートクラブ機関誌
『アーテスト』
展覧会記念号
1911 年

図 11　アートクラブ機関誌『アーテスト』
1911 年２月～８月
23.5 × 17.5cm　発行部数不明、非売

図 12
『LIGHT AND SHADOW』
（1-14 号）1913 ～ 1914 年
31.0 × 23.0cm

図 13 『TANPOPO』
1920 年
10 月～ 21 年 5 月
21.2 × 16.2cm
発行部数不明、
福島写真同好会の雑誌

図 14 『(閑光会アルバム)』
1921 年夏～ 1923 年春
24.8 × 29.0cm
発行部数不明、非売　閑光会の雑誌。現在判明 1 ～ 8 号

1912年　アートクラブ第２回展

図 15　田村鐵三郎《夜のステーション》

図 16　富田藤太郎 (不二夫)《手術》

図 17
田村鐵三郎
《ポートレート》

1913年　アートクラブ第３回展

図 18　富田不二夫
《戸山原》

図 19　金田北勝
《静か》

図 20　田村鐵三郎
《夕立雲》

図 21　田村鐵三郎《誘惑》

図 22　田村鐵三郎《零落》

図 23　富田不二夫
《利根の帰帆》

図 24　鈴木敏夫《無我》

図 25　鈴木敏夫《春浅し》

図 26　富田不二夫
《鹿島の杉》

図 27　富田不二夫
《ゴム印画色調》

図 28　金田北勝
《よはき日》

1921 年　福島写真同好会＊／ 1922 年閑光会

図 29　佐藤信
《叫び》
＊ 1921 年
『tanpopo』

図 30　鈴木紅雨
《堀の影》
1914 年
アートクラブ
第 4 回展

図 31　本田仙花
《春の小川》
1922 年

図 32　菊田長三郎
《BIRU・NITE》
1923 年

図 33　本田仙花
《フレンド》
1922 年

図 34　渡辺秀光
《離れゆく心》
1922 年

図 35　渡辺秀光
《女》1922 年

図 36　富田不二夫
《南風》1922 年

図 37　富田不二夫
《駅路》
1914 年

図 38　菊田蝶秋
《なやみ》
1922 年

図 39　本田仙花
《ステーション》
1922 年

佐藤 信 SATO Makoto

図 40　佐藤信 《都会》1928 年

図 41　佐藤信
《子犬のいる風景》
1920 年年代

図 42　佐藤信
《暮れ近き海》1933 年

図 43　佐藤信
《往来》1920 年代後半

図 44　佐藤信 《河畔》
1925 年 11 月下旬

図 45　佐藤信《夕闇は迫る》
1925 年

本田 仙花 HONDA Senka

図 46　本田仙花
《影》
1924 年
4 月 19 日

図 47　本田仙花
《萎えゆく花》
1920 年代

図 48　本田仙花
《静物》
1925 年
5 月 12 日

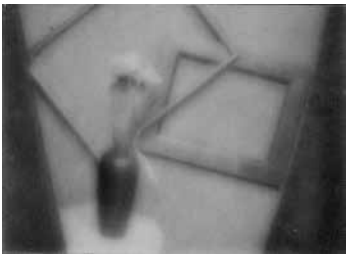

図 49　本田仙花　《静物》
1925 年 5 月 18 日

図 50　本田仙花　《陰鬱なる風景》
1925 年 8 月 29 日

図 51　本田仙花　《雪景》
1926 年 1 月 27 日

図 52　本田仙花　《静物》　1930 年

二葉会 Futaba-Kai Party

図 53　氏家健吉
《湖畔風景》 1924 年

図 54　村山俊吾
《朝の都会》 1925 年

図 56　川村重和
《海辺風景》 1935 年

図 55　島崎得之助
《湾内風景》 1930 年

図 57　金澤治男
《夜の静物》
1935 年 3 月

図 58　金澤治男
《晩夏の風景》
1934 年 8 月 28 日

図 59、60
本田仙花ほか冬山の写真展
（開催日時、場所不明）

図 61
二葉会例会写真
前列左から、小関庄太郎、一人おいて伊藤晨水、伊東松葉、木村長雄。後列左から、佐藤信、一人おいて本田仙花、本間第一郎、三浦通庸。（昭和初期か、佐藤信資料より）

図 62
二葉会の
バッジ

図 63、64
小関庄太郎手製のアルバム（傑作集 5）
添付写真は雑誌きりぬき

図 65
小関庄太郎
印画裏書き

図 65 の文面“繃帯の男”
1936 年　福島市置賜町
小関庄太郎（二葉会）

図 66、67、68
小関庄太郎ネガアルバム　右下に《二人像》（図 75）ネガ密着がみえる

小関庄太郎 KOSEKI Shotaro

図 69　小関庄太郎 《ふもとの家》
1925 年 2 月
福島市信夫山
『カメラ』
1926 年 1 月掲載

図 70　小関庄太郎 《田舎の風景》
1926 年 5 月
梁川町はずれ
『カメラ』
1926 年 8 月掲載
『芸術写真研究』
第 3 回　頒布作品
（1930 年 1 月）

図 71　小関庄太郎 《一人歩む》
1929 年 5 月
福島市外文字摺附近
『フォトタイムス』
1935 年 8 月掲載

図 72　小関庄太郎 《古風な町》
1928 年 10 月
福島市庭坂駅
『フォトタイムス』
1935 年 8 月掲載

図 73
小関庄太郎 《憩い》 1926 年 6 月／31 年頃のプリント　福島県桑折町付近
『日本写真全集 2 芸術写真の系譜』 小学館　1986 年
『日本の写真 1930 年代』 神奈川県立近代美術館　1988 年

図 74　小関庄太郎
《海辺夕景》
1937 年 8 月 5 日
宮城県野蒜海岸
『モダニズムの時代』
東京都写真美術館
1995 年

図 75
小関庄太郎 《二人像》 1932 年 6 月
『フォトタイムス』 1933 年 10 月（佐藤信の名で発表）／『日本写真史 1840-1945』 平凡社 1971 年／『日本の写真 1930 年代　神奈川県立近代美術館 1988 年／『モダニズムの時代』 東京都写真美術館 1995 年／『私を見て! ヌードのポートレイト』 東京都写真美術館 2010 年ほか

図 76　小関庄太郎 《二重肖像》
1932 年 6 月
『日本近代写真の成立と展開』
東京都写真美術館
1995 年
（別焼きの同館所蔵作品）

図 77　小関庄太郎　《遠い汽車》
1941 年 4 月 1 日
福島市金谷川
「小関庄太郎の光跡 3/4 世紀」
『朝日新聞』福島版 1997.4.2

図 78　小関庄太郎　《夢の汽車》
1933-36 年頃
猪苗代川桁付近
「小関庄太郎の光跡 3/4 世紀」
『朝日新聞』福島版
1997.3.12

図 79　小関庄太郎　《夕照》
1938 年 8 月 28 日
福島市隈畔

図 80　小関庄太郎
《ポンチョを衣た自画像》
2000 年 2 月
福島市内阿武隈河畔
「小関庄太郎の光跡 3/4 世紀」
『朝日新聞』福島版 2000.4.1